



聴き、感じ、考え、表現する力を育てる

音楽科

渡辺 景子

I はじめに

「私たちが何年もかかって体得して、未だにお稽古して追求していることを、たった5時間で語っちゃうなんて！」昨年度の邦楽囃子の実践を終えたときに、ゲストティーチャーとしてご協力いただいた先生が笑顔で話されていた言葉であり、学校の授業でも音楽文化の本質に触れることができたと感じた瞬間だった。生徒は、鼓を珍しいものではなく当たり前を受け入れ、なかなかいい音が鳴らないと苦戦しながらも、雛人形にある楽器だね、柔道や日本画の授業とも関係しそうだねと学びをつなげていた。また、「ゲストティーチャーの先生から教えてもらったこと」が、「邦楽囃子の体験を通して学んだこと、感じたこと、大切にしたいこと」へと実感を伴いながら深まっていく様子から、日本の伝統音楽が身近になかなか感じられないからと敬遠していたのは、教師の方だったのかもしれないと感じさせられた題材でもあった。

子供たちに、新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育むためには、学校が社会や世界と接点を持ちつつ、多様な人々とのつながりを保ちながら学ぶことのできる、開かれた環境となることが不可欠である¹⁾。開かれた環境となるためには、学校における音楽教育が社会の中でどのような立場か意識することが必要であり、前述のように、私たち教師自身が日本の伝統音楽や世界の多種多様な音楽と関わることもその一歩である。また、音楽科の学習においても、学校内での学習にとどまらず、生活の中で音楽を生かすことや生涯にわたって音楽を愛好しようとする思いや、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに諸外国の音楽文化を尊重する態度の育成が求められている。これらは、音楽科の学びが生徒個人の中でつながりをもつことや、多様な音楽・他者の聴き方・感じ方・表現の仕方に触れ、音楽的な価値観を広げることで達成されると考える。そのため、学校における音楽の学習で、音楽科の授業で「自律」と「共栄」に向かう学びを展開することは、重要であろう。

II 教科研究内容

1 音楽科における「自律」と「共栄」に向かう学び

音楽科における「自律」と「共栄」に向かう学びとは、表現する音楽に対する思いや意図をもち、聴き方・感じ方・表現の仕方を仲間と伝え合うことにより、試行錯誤しながら音楽的な価値観を広げたり深めたりすることであると考えられる。前次研究の課題であった、表現する音楽に対する思いや意図を生徒に明確にもたせ、仲間を示して共有することにより、学びの見通しをもつことを、特に大切にする。その思いや意図を実現するにはどのようにしたらよいかと、仲間とともに試行錯誤する活動を保証する。その結果、思いや意図に近づくような音楽表現ができたり、音楽的な価値観を広げたり深めたりすることを新たな知として獲得し、自ら学ぶ意欲を生み出すような学びを実現する。

具体的には、教師が音楽のあるべき姿を提示し、それを目指して訓練するような授業ではなく、生徒の音楽に対する思いや意図を明らかにし、理想とする音楽表現へとつなぎ高めるような授業を展開する。また、表現や鑑賞において「答え」を求めていくのではなく、聴き方・感じ方・表現の仕方について自由性や試行性を保障し、自他の異なる見方や考え方から、自身のもっている音楽の世界を広げるような授業を展開する。生徒一人一人が、感性を働かせて感じ取ったことをもとに、思考・判断し表現する一連の過程を大切にしながら、主体的・創造的に学ぶ姿を求めたい。

2 「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

(1) 表現に対する思いや意図を明確にし、示すための発問の工夫や場面の設定

音楽表現の豊かさや美しさは一律に価値付けられるものではない。そのため、教師のもつ価値観などをそのまま生徒に感じ取らせようとするのではなく、生徒自らが感じたり発見したりしたことを尊重し、そのことをよりよい表現に結びつけることが大切である。また、音や音楽に対するイメージを膨らませ、自分なりの意図

をもち、試行錯誤しながら創意工夫して表現する音楽活動の過程が重要とされている。「遠くまで通るような声で歌いたい」「明るく弾んだ雰囲気旋律を創作したい」という思いや意図が、音楽の学習を進めるうえでの見通しになり、それらを共有することで学習の意欲へとつながる。また、「この工夫を加えると、どのような効果があるだろうか」と発問を工夫し全体に投げかけることで、予想を立てたり新たな思いや意図を膨らませたりしながら学習を進める。表現に対する思いや意図があるからこそ、「姿勢や息継ぎを工夫するといいいのではないか」と解決の方法を計画したり「音高ではなくリズムに工夫を加えてみよう」と音資源を選択したりすることにつながる。

仲間とともに合奏・合唱を作り上げる過程では、「仲間と息のあった合奏をしたい」「きれいなハーモニーを作りたい」という思いを個々が表出し、目指す表現の方向性を確かめ合うことが「共栄」のきっかけともなる。思いや意図を伝え合うことで、同じ箇所についての解釈の違いが明らかになったり、仲間との演奏をよいものにしようと思うほど、厳しい指摘や批判的な意見が必要となったりする。その試行錯誤の結果、よりよい解釈を選択して表現しようしたり、自分の役割を考えて演奏したりすることが必要となる。互いの思いや意図を示しながら表現を高め合う活動が、共に活かし合い、互いの成長を支え合う活動といえる。

(2) 音や音楽によるコミュニケーションの充実を図ること

「音楽表現の創意工夫」及び

「鑑賞の能力」の評価には、ワークシートの記述内容が用いられることが多いが、音や音楽とかけ離れたイメージや思いに関わる言葉ばかりが優先される傾向がある。また、それらが〔共通事項〕の働きとは無関係に語られ、音楽経験が積み重ならないという問題点がある。そこで、生徒自身の表現に対する思いや意図、あるいは感じ取ったイメージや雰囲気と、音や音楽とを十分に関わらせながらのコミュニケーションの充実重点をおきたい。

図1は、「作曲者」「演奏者」「鑑賞者」の3つの立場を意識しながら、「自律」に向かう視点と「共栄」に向かう視点の連続性を意識して、創作した作品について交流を行ったものである。ワークシートに楽譜を位置づけ、楽譜に根拠を求めたり、仲間の作品を聞いたり演奏したりすることから感じたことや新たなアイデアを伝え合うことで、音や音楽から離れずにコミュニケーションを図ることができる。ま

★ROCK TRAPのソロパートで使いたいリズムはこれ!

③自分の判断でリズムに工夫を加え、「課題」を「作品のよさ」にする（「自律」に向かう視点）

中で工夫・修正をする場合は、消さずに赤で書き込む!

| | | | |
|-----|-------------------------|---------------------|-------------|
| 交流前 | 休符を入れて、リズムを少し変えた点 | 課題に思う点、新たなアイデアがほしい点 | 四分休符を音符に変えた |
| 交流後 | 四分休符を無くし、細かい音にすると、後半の休符 | | |

①課題に思う点・新たなアイデアがほしい点を作業者が明らかにする（「自律」に向かう視点）

◆仲間からの意見 ※シールを添付し、自分の意見も書き込もう

| | |
|---------------------|-----------------------|
| リズムがいい | 休みが多い |
| リズムがおもしろい | 休みが少し多いと思う |
| リズムの流れが良く、全体的に聞きやすい | 休符が続いているので、それを改善してほしい |

②演奏した結果、感じ方を明らかにし、どのようなリズムを加えたらよいか全員で検討する（「共栄」に向かう視点）

③仲間の作品の演奏を通して感じたことを、自身が創作した作品の工夫に活かす（「自律」に向かう視点）

図1 ポディパーカッションによるリズム創作の交流ワークシート

た、3つの立場を意識しながら交流することで、それぞれの交流の意義を理解して学習活動に取り組むことや、誰のどの場面での意見を活かすことができたのかを振り返ることができる。これらの学習活動を通して、知を獲得し、自ら学ぶ意欲を生み出すことにつながると考える。

(3) 学びの振り返りや、自己評価・他者評価の方法、記録の方法を工夫すること

「自律」に向かう視点として、継続した自己評価を行うため、1題材1枚の振り返りシートの取り組みを継続し、1題材の中での学びをつなげるばかりではなく、題材同士の学びをつなげる助けとする。授業での学びや自己の成長に対する評価も重要だが、その時間に印象に残った仲間の意見や、扱った音楽に対して自身がどのように価値づけたかを蓄積していくことも重要である。また、第一印象として率直に聞いて感じたことを残しておくことで、題材の終末には聴き方・感じ方・表現の仕方の変化や高まりを感じ、学びの価値を実感することで、さらなる学習意欲へとつながると考える。

「共栄」に向かう視点として、前述した(2)の手立てとも関連して、仲間の創作した作品や演奏したのものに対して適切な評価を行い言葉で伝えることを重視し、その記録方法を工夫する。これまでの実践から、シールを用いて個人の聴き方・感じ方を書き表してから交換すると、様々な視点からの意見が生まれ、1枚のワークシートに4色ボールペンを使用してどの立場から考えたのかを明らかにしながら意見を書き込んでいくと、記録からどの意見かを読み取れるばかりではなく、仲間同士で言葉をつないでいこうという思考が生まれたりするなど、教具を工夫することで評価の在り方を帰ることができた。生徒自身が他者の表現を評価することに加え、仲間からの評価をもらうことで自分の聴き方・感じ方・表現の仕方が更新される可能性がある。また、自分の創作した作品や演奏したのものに対しても客観視できるようになり、自己評価能力の高まりにつながると考える。

Ⅲ 実践例

第2学年 モチーフを変化させて旋律をつくろう 「A表現」(3) 創作 ア・イ

1 題材・教材の価値

| 時 | ○学習内容 ・主な学習活動 |
|---|---|
| 1 | ○昨年の「音の高さやリズムを変化させて旋律をつくろう」の学習内容を振り返る ○モチーフをつくる ・以下の条件でモチーフを創作する 4分の4拍子1小節、ト音譜表下第1線のC～第3間のCの音域を使用、#やbの使用不可、和音不可 |
| 2 | ○モチーフを変化させて旋律をつくる① ・教師の例示した作品をもとに、学習内容を把握する ・以下の条件でモチーフから旋律を創作する |
| 3 | ・仲間の作品の交流や検討(学級全体)を通して、どのような工夫ができそうかを交流する モチーフを8回コピー+ペーストしてから創作を開始、8小節～16小節で構成、#やbの使用可 |
| 4 | ○旋律の中間交流を行う ・①モチーフ、②変化のさせ方、③終わり方、④作曲者が困った点・アイデアがほしい点の4観点で、互いの作品を評価する。 |
| 5 | ○モチーフを変化させて旋律をつくる② ・中間交流を受けて、自分の旋律を再検討し、完成させる ・発表会に向けて、どのように創作したかを楽譜やワークシートに記入し、考えを整理する。 |
| 6 | ○発表会を行う |

本題材では、4分の4拍子1小節のモチーフを創作し、それらをつなげて展開させることによって8小節～16小節の単旋律を創作する。これまでの創作の学習とは異なり、ゼロから旋律を組み立てていくところに、生徒のアイデアが活かされるばかりではなく、仲間のアイデアや作品に興味をもてるような題材構成とした。第1学年「音の高さとリズムを変化させて旋律をつくろう」を通して音符を操作した経験や体験した思考や、これまでに鑑賞した経験が、つながりをもって活かされることが考えられる。教具には、タブレット型端末と楽譜作成アプリ symphony pro を使用する。本稿では特に、タブレット型端末を用いた旋律創作

の過程と、作品の工夫改善を図るために行った交流を中心に述べていく。

2 第4時における「自律」と「共栄」に向かう学びとその手立て

題材全体を通して、創作した旋律に対する思いや意図をもち、それを表現するための工夫について自ら情報を得ることを特に意識した。教具に用いるタブレット型端末は、楽器の役割を果たせるうえ、生徒の記譜力・読譜力・演奏力不足を補う道具として活用できるほか、これまでの実践からも試行性とともに出る音楽の自由度が高い教具であると捉えている。しかし、昨年度の実践で生徒から「みんなの作品を見ると、全部いいような気がするから、逆に自分のアイディアが狭まる」という声が複数あがったことをふまえ、第1時から第3時では、旋律創作の視点を整理するものにとどめた代わりに、創作中に聞こえて気になったものなどについて自由に交流することを認めている。また、創作の過程で生徒が注目している要素とは異なる他の要素の情報を、無意図的に与えないように配慮した。

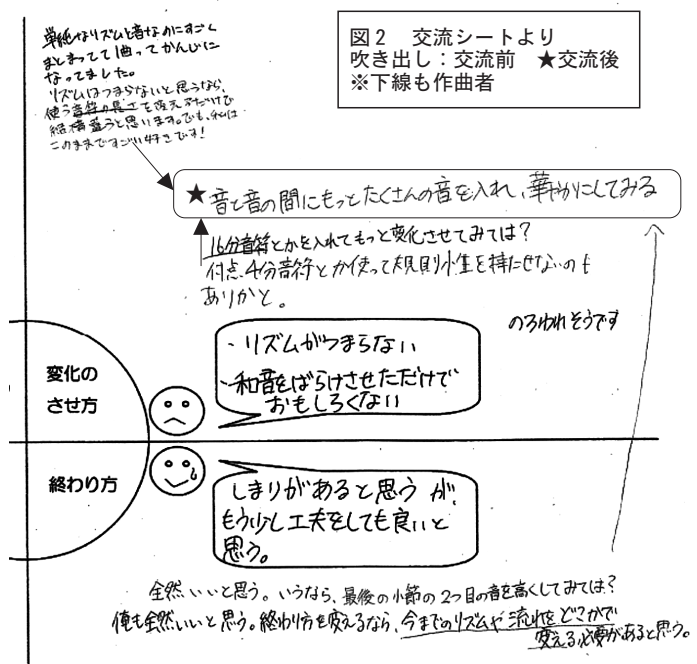
ここまでの取り組みを生かした中間交流にするためには、作曲者が自身の作品の評価を適切に行い、どのような情報がほしいのかを把握し、得た情報の中から自分で選択して作品の工夫に活かすことのできるような方法が必要と考えた。そのため、タブレット型端末の演奏者としての役割を強化することと、これまでの創作や交流の経験をふまえてワークシートの改善を行い、自らの考えを楽譜と言葉を活用しながら発信・受信することをねらった。これらの手だてが、「このような旋律をつくりたいという思いや意図を明確にすること」、さらには「自律」と「共栄」に向かう学びにつながると考える。

3 授業の実際

第4時の中間交流は、右の写真のように、置いてあるワークシートとタブレット型端末から鑑賞者が自分の聞きたいものを選びアクセスするという方法をとった。作曲者本人がその場にいるのではなく、タブレット型端末に演奏者の役割を完全に任せても、鑑賞者である生徒は楽譜と音、ワークシートから作曲者の意図を読み取ることができていた。また、書き込みについてわからない点がある場合は、後に書き込んでくれた仲間に意見を聞きに行くなど、自らの作品をよりよくしようとする態度が現れていた。



音資源を選択するための具体的な判断材料として、作曲者が①モチーフ、②変化のさせ方、③終わり方の3つの観点から自作品を評価し、4象限に分割したワークシート中央の表情と吹き出しに考えを書き込んでいる。第3象限は困った表情を事前に書き入れておき、作曲者が困っている点やアイディアがほしい点を、項目から自由に書き込めるようにした。実際には、前の小節とのつながり、全体の構成や流れ、モチーフの形を残すには、などの項目があがっていたが、どの項目についても、〔共通事項〕である旋律やリズムの視点から意見を交流することができていた。また、これまでの実践においては生徒の思いや意図を優先しすぎるあまり、どの音楽的な要素について議論をしているのか、曖昧になってしまう場合が多かったが、ワークシートを4象限に分割することで生徒自身も何について思考しているかが明確になり、自他それぞれの作品にアイ



ディアをもち、意見を共有したり、仲間のアイディアから自分の意見をもつことができていた。

鑑賞者としての考えは、よさについては青、新しいアイディアについては赤のボールペンで記入した。従来シールで行っていたものを4色ボールペンに変更し、書き込むスペースも広く設定したことで、絵や言葉で感じたことを自由に記入したり、「リズムが単調でつまらない」に対して矢印で「それ、私も思った」「僕はこのままで結構好き」とつないだりと、聴き方や感じ方を自由に表現することができていた。また、教師も同様の活動に参加することで、教師の意見が“答え”ではなく“生徒と横並びの一意見”として扱われたことも、自分なりの音楽の価値判断、つまり自己評価能力の高まりにつながる可能性があると考えている。

交流後に作曲者が自分のワークシートを眺め、考えや新たなアイディアを記入する際には、緑のボールペンを使用した。右の生徒は、分散和音から発想して旋律を創作したため、リズムが単調であることや、終わり方に工夫が足りないことに悩んでいたが、仲間のアイディアからリズムを細かくして経過音を加えることで解決できると考え、工夫を加えた。16分音符のアドバイスに対して8分音符を加えたり、その音程を工夫していたり、4小節フレーズを意識した旋律になっていたりすることから、仲間の意見を取り入れながらも自分の判断で工夫を加えている。仲間の意見から自分の旋律創作について思いや意図を再確認し、その意見を参考にしながらも自分の考えを音で表すことができていることから、「自律」と「共栄」に向かう学びを実現できたものと言える。

1
7
13

交流時の楽譜：交流を終えて、工夫したいことを記入したもの

完成した作品：仲間からのアドバイスをもとに、休符や8分音符を用いてリズムに変化をつけている

1
6
12

図3 交流前後の作品の変化

IV 実践から見えてきたこと

「自律」と「共栄」に向かう学びを窓として授業を捉えた場合、生徒が元来持っている「学びたい」という気持ちをどれだけ引き出し表出させるのかということに加え、自らの意欲と創意によって学びを推し進めていけるような力をつけるための手立てを講じるべきであると考えている。その点では、生徒の表現に対する思いや意図を大切にしながら学習を展開できたことが大きな成果である。また、自由性と試行性をもって考えを表出させた成果として、学習事項について理解できているのかできていないのか、技能が身に付いているかないかなど、生徒の実態がよく見えるようになったと感じている。学習における自由度を高くし、生徒が音と音楽を通したコミュニケーションや試行錯誤をするためには、〔共通事項〕の理解、音や音楽を表す言葉の習得、音楽科における基礎・基本を習得し、ツールとして生徒自らが操れるようにすることが必要である。その点から、3年間の学びの連続性を意識した題材構成、さらにはカリキュラムをデザインしていくことが急務であろう。

V 引用文献

- 1) 文部科学省『教育課程企画特別部会 論点整理』2015、p.3